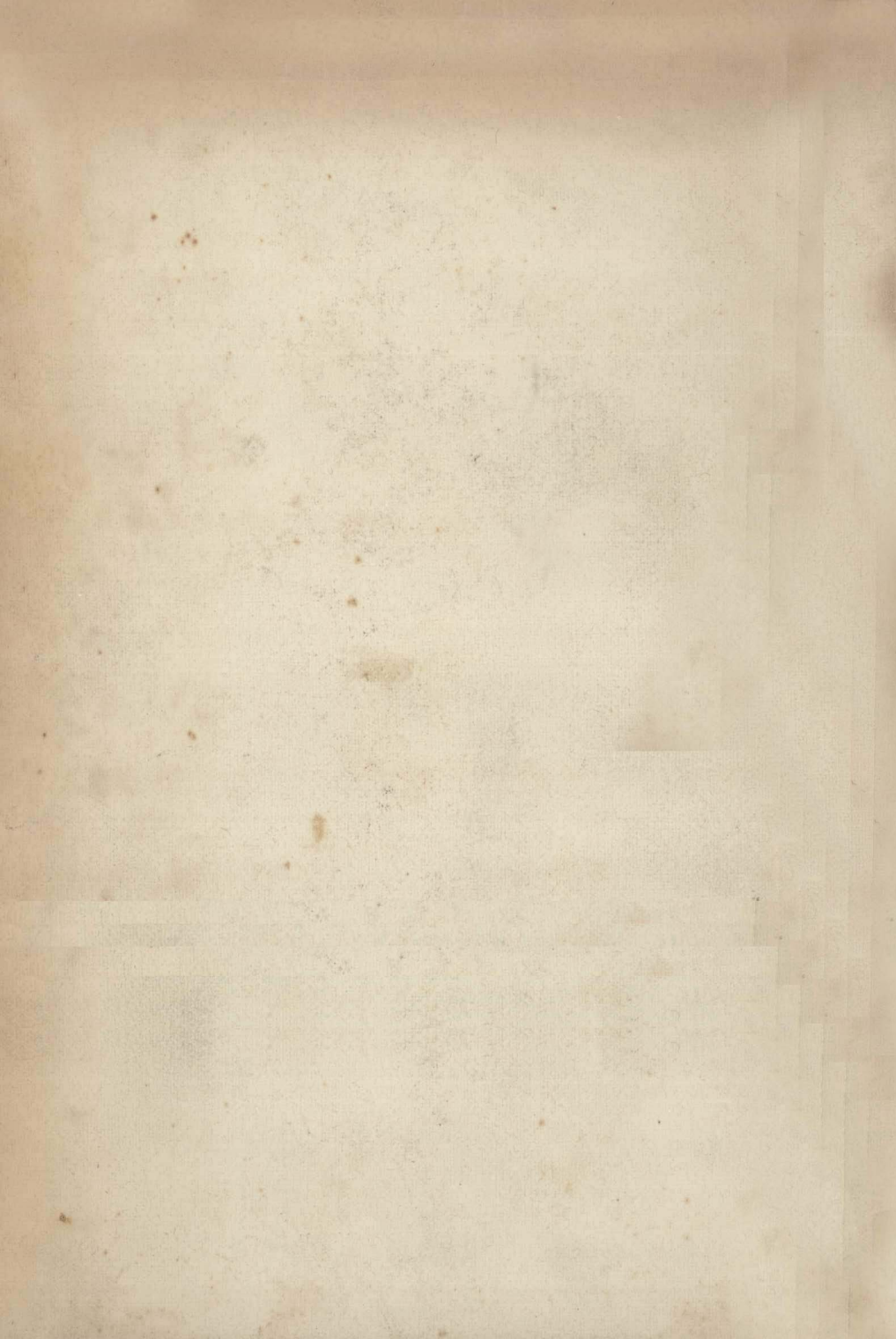




三

日

西

么

保

田

戸

子

印

三の酉

限定三百部之内
第一冊



昭和三十一年十月十五日印刷

昭和三十一年十月二十日發行

著者久保田万太郎 發行者栗本和夫
印刷者山元正宜 發行所中央公論社
東京都千代田區丸ノ内二ノ二丸ノ内
ビルディング五九二區 電話和田倉
(20)一一二一番振替口座東京三四番

頒價六五〇圓

〈三晃印刷・協和製本〉

目次

青くひかる海

一

多くぼもあばた

一七

……多ひもせず、ん

三九

三の酉

五九

喜劇役者の憤り

九三

しのび泣き

一一

ひとつばなし

一三五

□

われおもしろのわれをかし・序説

一五一

十年……

一六九

鳥、雲に

一八七

□

さて、そのあくる日……

二一五

□

“あとがき”に代へて

二六九

青くひかる海

ぼくは映畫屋だ。……あんまり賣れないシナリオライターだ。

が、ぼくは、元來、映畫より芝居のほうが好きなのだ。……といふよりも、映畫より芝居のはうを、はるかにソンケイしてゐるのだ。

但し、芝居といつても、新劇ぢやアない。カブキだ。

だから、ぼくは、原田素水先生のケイガイに接しえたことを、無上のよろこびとし、光榮とした。

□

原田素水、といへば、明治華やかだつた時代、團十郎、菊五郎、左團次といった名優たちの立派にまだ生きてゐた時分からの人だ。……さういふ名優たちと、親しく膝を突きあはせて、戯談じやうだんぐち口さへきゝ合つた人だ。……

だから、ぼくとは、親と子ほど……といひたいが、じつは、もつと以上に、それこそ、おいさんと孫ほど年がちがふ。……だから、ぼくは、半世紀にわたつて、カブキとゝもに生きつゞけて來たこの老劇評家に、一度逢つてみたいと思つたが……といふよりも、思はないでもなかつたが、およばぬ望みとあきらめた。……五六年まへのことだ……

その代り、新聞であれ、雑誌であれ、いやしくも素水といふ署名のあるものは、どんな片々たるものでもみ逃さなかつた。だから、ある雑誌のアンケートに、先生、経歴を訊かれて、「べつに申し上げるほどのことも無之候」とこたへたやうなものさへぼくは知つてゐる。……それにしても、「べつに申し上げるほどのことも無之候」といふ返事は、いかにも素水先生らしい。……といふ意味は、いかにも明治の人らしい。……ランプのひかりの仄かな中で育つた人でなければ、こんな恬淡な、あッさりしたことはない。……といつたつて、ランプのひかりつてものが、どんなに仄かだ

つたか、残念ながらぼくは知らない。……たゞ、さうした感じのものぢや
ゝなかつたかと思ふだけのはなしで、とにかく、ぼくたちとは、生活環境
のまるでちがつた先生は、だれかもいつたやうに隠者の風がある……

尤も、先生にしたら、日本橋の木綿問屋に生れて、べつにどこの大學へ
行つたといふわけでもなく、たゞ好きといふだけではじめたといふカプキ
の研究だから、申し上げたくつても、ほんとに申し上げることがないんだ、
それにうそもかくしもないんだ、と、はッきり、おいひになりたかつたの
かも知れないが……

□

ところが、だ、嘗てのその『およばぬ望み』とあきらめたそれが、何ん
と、おもひもよらず簡単に、いともわけなく、かなへられたのだ。

といふのが、『魚松』。……江戸橋を、本町のはうへすこし行つたところの

横町に、わざと、おもてに、繩のれんを下げ、油障子を入れた、さうした名まへの小料理屋……といふほどもない、腰かけの、小ぎれいな、そのくせ人めにあんまりつかない、しづかな店だ。……来るのはみんな馴染の客ばかりの、かねてぼくもその一人で、その主人の氣ッぷがいゝので、ときゝおもひだしちやア飲みに行くんだが、今年になつて、ぼくが行くと、かならずといつていゝほど始終來てゐる老人があつた。……いつも和服で、角袖の外套、料理場のまへのスタンド……とりつけの狭い臺のまへに、うしろをみせて腰をかけ、一人しづかに、黙々と猪口を口に運んでゐた。……一度、何かの拍子でうしろを向いたとき、ぼくは、おや？と思つた。……何んといふ、整つた、おだやかな、むかしの役者のやうな輪廓をもつた顔だらう……と、途端に、ぼくは、驚いたのだ……

その老人の、幸ひに、ぼくよりさきに歸つたとき

——何をする人だい、あの人？……

と、ぼくは、主人に聞いた。

——書きものをなさる方で……

と、主人はいつた。

——書きものッて、どんな書きもの？……

——おもに芝居のことなんぞを……

——芝居のことなんぞを？……

——へえ。

——名前は？……

——原田さんと被仰います。

——原田さん？……

——へえ、原田素水さん……

——えッ？……

と、ぼくは、そのときもつてゐたビールのコップを手から放した。……

コップは土間に落ちて、微塵に……すくなくも、ぼくの氣もちの上では……
……くだけた。

神よ。……あはれ、神よ……

と、正月の末、まだ、まゆ玉の下つた天井を仰いで、ぼくは、ひそかに
合掌した。

あゝ、何といふ……

——おい、君、飲まう。……一しよに飲まう。……わが素水先生のため
に、あらためて……

と、ぼくは、主人に呶鳴つた。

そのあと、ぼくは、素水先生が、いかにすぐれた劇評家だかといふこと
を……カブキにとつて、いかに大切な、カケガへのない人だかといふこと
を、縷々、説明して、だから、ぼくは、何んとかして先生の弟子になりた
い、先生の指導がうけたい、といふ、嘗ての望み以上の望みを、きはめて

手がるにぶちまけた。

——とにかく、今度、一度、逢はせてくれ。……改めて紹介してくれ……

……

と、ぼくは、いさゝかロレッツのまはらなくなつた……にちがひない……わが舌を鼓^こしていつた。

——ぼくは、しがない、太^{はなは}だ賣れない映畫のシナリオ書きだが、カブキを信仰し、素水先生を支持する點に於ては、専門にカブキを研究するどんな奴にも負けないつもりだ……

主人は、事の、あまりに突然なのに、目を見張るばかりだつた……らしい……

□

數日ならずして、ぼくの望みは、半ば、實^みを結んだ。

半ば、といふのは、「魚松」の主人のあッせんによつて、首尾よくお目通りは相叶^{あひかな}つたが、弟子入の件は、あッけなく蹴られた。

—— ぼくのやうな無學なものが、人さまにモノをお教へするなんて、そんな大それた……

と、さういつた素水先生の無表情さ……

もし、ぼくが、いつものやうに酔つてゐたら、決して、そのまゝ、引下^{ひきさが}らなかつたらう。……しかし、その日は、どうしたのか、いくら飲んでも、ちツとも調子がでなかつた。……ばかりでなく、そのまへに、第一、飲むのがいやだつた。

ぼくは、それを、主人に訴へた。

—— 胃がおわるいんぢやアないんですか？

と、主人は、きはめて散文的なことをいつた。

と、そのとき、

——酒つてものは、飲みたくないときには、飲んぢやアいけません。

と、素水先生は、フイと口をだした。

——酒つてものは、飲みたくないときには……

ぼくは、口の中で、ぼく自身、その一ト言をいつてみた。

□

——一たい、素水先生は、幾つなんだらう？

——七十二三。……ことによると、もットにおなりになるかも知れませ

んナ。

——それア、そのはずなんだが。……若いナ、しかし。……六十代だナ、

まだ……

——なか／＼お洒落しやれでいらつしやるから……

——お洒落しやれッていふんぢやアない、身だしなみがいゝんだ。

—— あゝ、なるほど……

—— よッぽど、シッかりしてるんだナ、奥さんが……

—— ところが、おありにならないんださうで、奥さんは……

—— 奥さんは、ない？……

—— へえ。

—— ぢやア、奥さん代りの……

—— べつに、さういふ方も、おありにならないらしいんで……

—— ぢやア、誰が、身のまはりの世話を？……

—— 通^{かよ}ひの家政婦がゐるんださうです。

—— 随分、ぢやア、不自由だらうナ？

—— と思ひますけれど。……しかし、原田さんは、一度も奥さんをおも

ちになつたことがないさうで……

—— ぢやア、先生、家庭つてもものゝ味^{あじ}を？……

——御存じないわけで……

——寂しいはなしだな。

——と思ひますけれど、はじめッからお嫌ひなんださうで、家庭ッてものが。……圓滿な家庭なんてものをみると、くすぐったくおなりになるさうで……

——こまつたナ、それァ……

——しかし、すっかり、もう、お一人ぐらしが身についておしまひになつて、朝はパンと牛乳、おひるは蕎麥のカケ一つ、晩はおなじみの、われわれのやうなところを順ぐりにおまはりになるんで。……で、始終、被仰ることは、親方、人間は、一人ッてことが一番幸せだよ……

——で、それで、どんなものが好きなんだね、先生？……

——喰^{あが}るもんですか？

——うん。